



No.54 2024.06

土木史フォーラム

Newsletter of Committee on Historical Studies in Civil Engineering
Japan Society of Civil Engineers

目次

フォーラム	土木遺産としてのダム	中野 朱美	1
地域のニュース	歴史遺産をととして富山の近代を語る	白井 芳樹	4
	荒川放水路通水 100 周年記念を踏まえた 旧岩淵水門の重要文化財指定について	伊納 浩	7
学会の動き	「戦後土木施設の歴史・文化的価値に関する調査小委員会」 の活動について	阿部 貴弘	9

フォーラム

土木遺産としてのダム

土木学会 土木史広報小委員会委員 中野朱美

【ダムの歴史】

およそ 5000 年前の古代エジプト時代からダムは築かれてきました。現代ではダム建設は高度な土木技術を要する一大プロジェクトであり、その設計や建設には地質学、水理学、構造力学等、数多くの専門知識が活かされています。ダムが完成すると水の供給が安定し、農業や工業はもちろんのこと都市部の安全な水源として利用され、さらには水力発電を通じて再生可能なクリーンエネルギーとして活用され、地域の発展に重要な役割を果たしています。近年ではダム湖や周辺施設が観光客を引きつけ、市民のレクリエーションやスポーツの場としても有効利用されるようになっていきます。

我が国のダムの歴史を振り返ってみると、現存するダムで最も古いものと言われているのが飛鳥時代に築造された狭山池（大阪府）です。これは土堤によるアース式ダムで、「古事記」や「日本書紀」にもその名が記されており、天平 3（731）年に僧行基により改修工事が行われたとの記録が残っています。次に古いのが満濃池（香川県）で、周囲約 20km の土堤によるアース式ダム。大宝年間の 701 年頃に築造されたとされており、弘仁 12（821）年に僧空海が改修工事をしたとの記録があります。貯水量は約 1540 万 t で我が国最大級の溜池です。ともに現在でも地元の水源地として利用されています。その後、こ

うした土堤による溜池は全国各地で築造され、やがて江戸から明治に時代が変わった頃に、コンクリートを用いた近代ダムが築かれるようになります。

明治時代、海外諸国との交流が活発になると赤痢やコレラ等の感染症がたびたび流行したため水道に注目が集まります。そこでダムを水源とし、さらに水力発電にも利用するという考え方が広まり、明治 33（1900）年には神戸市が水道用として我が国初の重力式コンクリートダム、布引五本松ダムを完成させます。その後、全国で様々なダム開発が始まります。大正 11 年（1922 年）には日本初のダム式発電所を併設した大井ダムが建設され、木曾川流域には多くの水力発電所が建設されることとなります。また第二次大戦後は、復興需要のため多くのダム事業が推進され、大型ダムが次々と完成します。その代表格が静岡県の佐久間ダムです。佐久間ダムは堤高 155.5m で発電量は 147.5 万 kw。昭和 28（1953）年に着工し、わずか 3 年で完成しました。その原動力となったのが輸入大型建設機械による土木の機械化工法です。これ以降、続々と大型ダムが建設され、大ダム時代に突入していきます。当時、完成した大型ダムの目玉でもある黒部ダムは昭和 31（1956）年に着工され、近畿地方の電力需要に応えるために、関西電力が社運をかけて行った一大プロジェクトでした。当初は黒部川第四発電所にちなみ「くろよん

ダム」と呼ばれていましたが後に「黒部ダム」と正式名称がつけられ、破碎帯を貫く関電トンネルの難工事の様子は石原裕次郎が主演した映画「黒部の太陽」でも有名です。

このようなダムの歴史を踏まえ、2014年には年間100万人が訪れるダムを比較してみようということで、第2回 土木 a la mode 「黒部ダム VS 宮ヶ瀬ダム」～人を惹き付ける魅力はどこに？～ 開催報告 / 土木学会 社会コミュニケーション委員会 (jsce.or.jp)を企画させて頂き、土木学会講堂は満席となりました。黒部ダムは、過酷な山岳地帯にダム建設のために道路や線路が整備され、美しい自然を求めて多くの人々が訪れるようになりました。一方、宮ヶ瀬ダムは、昭和46(1971)年に着工され、都会から近い位置にありながら直下からダイナミックな放流を楽しむことができることで人気を集めました。これらのダムはインフラツーリズムの一環として注目されました。

【土木遺産となったダム】

日本には、現在約2800基のダムや堰堤があります。ダムの定義によると堤高15m以上のものがダムとされています。2024年時点で、以下のダムが土木遺産に選ばれています。先人たちの知恵と工夫で造られ、自然と融合した土木遺産は、長い歴史を経て守られています。

土木学会選奨土木遺産 (jsce.or.jp)に14基とダム群(9基)

稲原ダム(宮崎県)、神通ダム(広島県)、三条市木野川ダム(新潟県)、下石黒ダム(長野県)、高滝ダム(宮城県)、積翠寺ダム(石川県)、田町ダム(岐阜県)、富府ダム(長野県)、平谷ダム(兵庫県)、平野ダム(長野県)、布引ダム(山口県)、美濃赤坂ダム(岐阜県)、室堂ダム(長野県)、大井ダム・大井発電所(岐阜県) 只見川ダム施設群(福島県)(奥只見ダム、大鳥ダム、田子倉ダム、滝ダム、本名ダム、上田ダム、宮下ダム、柳津ダム・片門ダム)

1. 布引ダム

バルトンによる原案があった布引ダムは日本初の重力式粗石コンクリートダム。その他、烏原ダム、干苅ダムといった神戸水道3ダムは近代土木遺産にも登録されている。



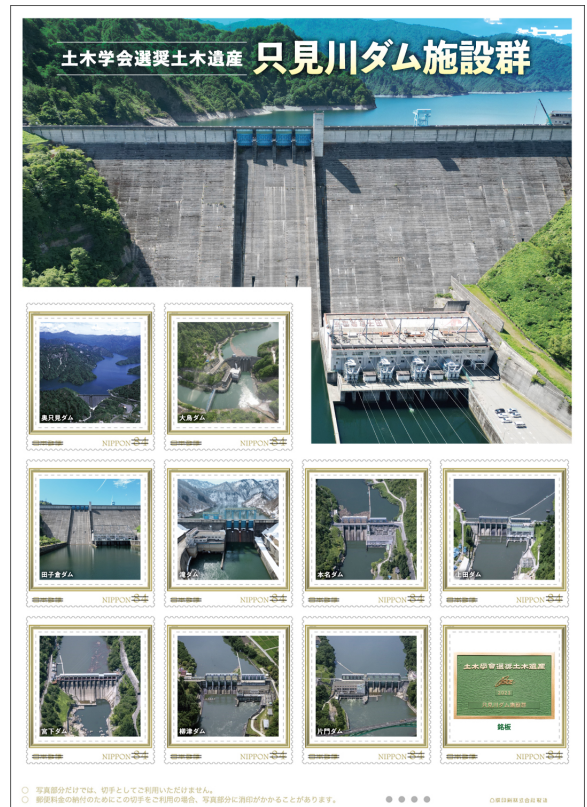
2. 大井ダムと大井発電所

日本初となるダム式発電所となる大井ダムと木曾川流域にある数多くのダムと水力発電所群。



3. 只見川ダム施設群(9基)

オリジナルフレーム切手「土木学会選奨土木遺産 只見川ダム施設群」の2024年5月1日 販売開始 - 日本郵便 (japanpost.jp)



次いで、近代土木遺産リスト (mlit.go.jp)に 24 基のダムが選ばれています。

千歳第一取水堰堤(北海道)、笹流堰堤(北海道)、大湊第一堰堤(青森県)、藤倉堰堤(秋田県)、黒部ダム(栃木県)、丸沼ダム(群馬県)、鹿瀬ダム(新潟県)、白岩堰堤(富山県)、小牧ダム(富山県)、小屋平ダム(富山県)、大井ダム(岐阜県)、上麻生ダム(岐阜県)、大間ダム(静岡県)、布引堰堤(兵庫県)、鳥原堰堤(兵庫県)、千刈堰堤(兵庫県)、上田池堰堤(兵庫県)、恩原ダム(岡山県)、豊稔池堰堤(香川県)、河内堰堤(福岡県)、本河内高部ダム(長崎県)、西山堰堤(長崎県)、白水堰堤(大分県)、塚原ダム(宮崎県)

4. 豊稔池堰堤

日本最古の石積式マルチプルアーチダム。



5. 笹流堰堤

日本初のバットレスダム。



6. 白水堰堤

粗石コンクリート重力式ダム。流水が美しい。



【土木史サロンとの出会い】

2015年11月11日に開催された、第1回土木史サロン「土木の歴史に学び、現在、そしてこれからの社会を考える」のパネルディスカッションで、「ダムの魅力をもっと多くの人に伝えるための取り組み」と題して講演させて頂いたことが、土木史サロンとの出会いでした。その後、2023年7月20日開催の第8回土木史サロン「宝ものは土木の歴史にある」では司会進行をさせて頂きました。今後も土木遺産、土木遺構として歴史に名を刻んでいるダムはもちろんのこと、流域に住む人々の暮らしを支えているダムの役割と魅力を多くの人に伝えていければと願っています。

地域のニュース

歴史遺産をとおして富山の近代を語る

富山近代史研究会理事 白井 芳樹

2024年1月、北日本新聞（本社富山市）のジュニア紙面で「とやまの近代と歴史遺産」の連載が始まった。県内各地に残る歴史遺産をとおして富山の近代を共に学んでみようというものである。北陸富山から最新のニュースとしてこの連載についてご紹介したいと思う。

連載のきっかけ

北日本新聞は、「ぶんぶんジュニア」という小中高生向けの紙面でふるさとを学ぶ郷土史シリーズを定期的に掲載している。昨年、新しい企画について富山近代史研究会（城岡朋洋会長）に打診があった。

富山近代史研究会は「富山県の近代史を共同研究する」ことを目的に昭和51（1976）年、故高井進氏（初代会長）を中心に設立された会で、現在、会員は48名。多くは郷土史の研究者や高校の日本史の教員（現役、OB）で、わずかだが県外の会員もいて筆者もその一人である。大半がいわゆる文系で、理系・土木は土木学会員でもある貴堂巖氏と筆者の二人である。会では毎年春の総会に合わせて会誌を発行、会員の論文・論考・随想などを掲載している。夏～秋には公開シンポジウムを開催し、県民の方に研究活動の一端を紹介している。最近は、中堅・若手の会員も増え、活動の充実が期待されるころである。

新聞社からの打診の内容は、富山の近代について、毎週1回・半年～1年間連載する、毎回1,200～1,300字で、小学校高学年を主な読者とする、というものだった。同紙の郷土史シリーズにはこれまでも研究会の会員が分担して原稿を執筆してきた経緯がある。会員にとっても自分の研究成果や知見を披露する良い機会であり、若い人たちに向けて分かりやすい文章を書く訓練の場ともなっている。

連載の企画

今回、新たな連載の打診を受けて、城岡会長は「読者対象からして、漠然とした通史や出来事史ではなく、モノに即して富山の近代の特色が浮かび上がるようなものがないのではないか。具体的には富山県教育委員会『とやまの近代歴史遺産』（2010年）に掲載された歴史遺産を取り上げ、「歴史遺産が語る富山の近代」といった切り口で会員が分担して執筆す

る」ことを考え、筆者に相談があった。

筆者は連載の趣旨に賛同し、連載の企画を手伝うと共に、連載の監修を務めることになった（連載全体の統括は会長が担当）。この間に新聞社との間で、連載期間は半年間、全25回とすることが決まった。

連載の参考にする『とやまの近代歴史遺産』は、松島吉信氏（土木史広報小委員会地域委員）が富山県勤務時代に取りまとめた冊子で、掲載する遺産の選定にあたっては筆者も加わったことがある。同冊子には106の歴史遺産が地域別に掲載されていて、巻末に遺産の種類別一覧表が附いている（写真1）。

連載では、プロローグとエピローグに各1回を充てるとして、残る23回でどの歴史遺産を取り上げて紹介するか。106の遺産を個々に判断するのではなく、全体に目配りしバランスよく選び出す必要がある。そこで、筆者は、人々の「暮らし」の視点から大まかな分類を考え、これに沿って代表的な歴史遺産を選び出すことを提案した。

暮らしを まずは安全に 治水、防火
そして豊かに 利水、交通、産業、
教育、娯楽、行政

この分類に沿って城岡会長が各回のテーマ（取り上げる歴史遺産）を決め、会員に示して執筆希望を募った。その結果、延べ25人、実数11人の執筆者が決まった（多い人で一人4回執筆）。

連載の開始

こうしてよいよ連載が始まることになった。

連載第1回は、筆者が監修者として考えていることを綴ってみた。テーマとしてとりあげた歴史遺産を単に紹介するのではない、地域の自然や暮らしのなかでその施設が造られ、使われ、その結果、暮らしがより安全に、豊かになってきたこと（近代化のあゆみ）を、執筆者にはできるだけ具体的に分かりやすく書いて欲しいとお願いし、読者にはそうした点を読み取っていただきたいという希望をこめて書いたものである。以下に引用する（北日本新聞2024年1月10日朝刊掲載の本文）。

とやまの近代と歴史遺産 ①プロローグ

豊かな暮らし支える

「立山に降り置ける雪を常夏に見れども飽かず

神からならし」。万葉の歌人大伴家持の歌です。

立山連峰など高い山々が連なって新潟、長野、岐阜、石川との県境をなし、北に富山湾が深く落ちこむ。山と海に挟まれて平野が広がり、大きな川がいくつも流れる。これが私たちの県土です。それは美しい景観を形づくり、豊かな幸をもたらしてくれます。一方、山の土石流や川の氾濫など大きな災害を引き起こすこともしばしばありました。私たちの祖先はこうした災いと闘いながら安全で豊かなくらしを築いてきたのです。

(山も川も自分の足で)

山と川はまた、人が行き来する妨げにもなります。昔はどうやって山や川を越えていたのでしょうか。

初めに紹介した大伴家持は奈良時代の貴族で、そのころ越中国(富山県と石川県の一部)の国守を務めていました。自分が治める国の各地を巡り多くの歌を残しています。

「鵜坂川渡る瀬多みこの吾が馬の足掻きの水に衣濡れにけり」。「立山の雪し消らしも延槻の川の渡瀬澄浸かすも」。神通川を馬で越えるときに水しぶきで衣が濡れ、増水した早月川では馬の鍔が水に浸かってしまったのです。橋がない川は自分の足か馬で越えるしかありませんでした。

山はどうだったでしょう。1893(明治26)年8月、イギリスの登山家ウォルター・ウェストンは北アルプスを横断しました。長野県の大町から後立山連峰を鉢ノ木峠で越え、黒部川を渡り、ザラ峠で立山連峰を越えて立山温泉の宿にたどり着きました。2泊3日の山旅でした。山の向こうへ行くには峠をめざして登り、そして下っていくしかなかったのです。

今はどうですか。神通川など県内の河川には鉄やコンクリートの橋が何本も架かり、道路や鉄道が通っていて、車や列車であつという間に川を越えられます。北アルプスでは大町から関電トンネルをバスで抜けて黒部ダムへ、さらに立山トンネルをバスで抜けて室堂まで短時間で行くことができます。

(明治に大きな変化)

もちろん一足跳びにそうなったわけではありません。大きな変化が訪れたのは150年ほど前、明治になってからです。士農工商の身分制度から四民平等になり、住むのも旅行するのも仕事を選ぶのも自由になりました。そして、鉄道が敷かれて汽車が走り、港には汽船が出入りし、郵便や電信、電話で情報が伝わるようになりました。さらに、家には電灯がとまり工場では機械が動き、学校や図書館ができて誰もが学べるようになるなど、暮らしを支える新しいものが次々と現れました。このような変化を「近代化」と呼んでいます。

近代化を支えてきたさまざまなものは今も県内各地に残っていて、その多くが現役として働いています。

この連載では毎回、近代歴史遺産を取り上げ、それがどのように造られ、暮らしがどう変わり、安全で豊かなものになってきたかを学んでみたいと思います。執筆は、富山県の近代史を研究しているメンバーが担当します。どうぞお楽しみに。(富山近代史研究会理事 白井芳樹)

連載の進捗、反響など

1月10日に連載開始、その後も毎週水曜日に掲載され、今日(5月22日)、第20回が掲載された。毎回取り上げる歴史遺産は表のとおりである。近代の歴史遺産を対象としているので、立山砂防や富岩運河など土木史でおなじみのもの以外に、消防自動車や灌漑用水の分水槽、鰯漁で財をなした網主の倉庫なども取り上げている(写真2~4)。

表 連載「とやまの近代と歴史遺産」一覧

*印は写真を掲載

回	区分		テーマ(歴史遺産)		
1	はじめに			プロローグ	
2	くらしを安全に	治水	河川	早月川五厘堤	
3			砂防	立山砂防泥谷堰堤群	
4		立山砂防白岩、本宮堰堤			
5		防火	消防	砺波 消防自動車チャンドラ号*	
6	くらしを豊かに	利水	水道	高岡 清水町旧配水塔	
7			灌漑用水	庄川合口堰堤	
8				片貝川東山田筒分水槽*	
9			発電	庄川発電所群	
10				常願寺川県営発電	
11				黒部川発電所群	
12				黒部峡谷鉄道	
13			くらしを豊かに	交通	道路
14	橋梁	神通川笹津橋			
15	鉄道	高山本線の橋梁			
16		鉄道駅舎			
17	産業	港湾			富岩運河と二つの開門
18		漁業			氷見 網主倉庫*
19		工業	南砺 旧富山紡績工場		
20	金融	旧高岡共立銀行本店			
21	くらしを豊かに	教育	学校	滑川 田中小学校旧本館	
22			南砺 旧富山県立農学校本館		
23			娯楽	公園	高岡古城公園
24	行政	庁舎	富山県庁舎		
25	おわりに			エピローグ	

まだ連載の途中だが、毎回、小中高校生のほか広い年齢層の方に概ね好感をもって読まれているようで、ほっとしている。また、専門家などテーマに関

心の深い方からは思わぬ誤りを指摘していただくなど、改めて気を引き締めているところでもある。

つの用水に、縁の仕切り壁により水田面積の割合に応じて分水している（昭和30年完成）

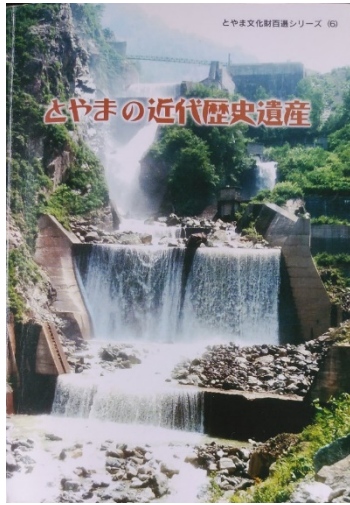


写真1 「とやまの近代歴史遺産」
富山県教育委員会、2010年



写真4 網主倉庫「彦右衛門の倉」
丸山格司氏撮影

能登半島の富山湾沿いを走る灘浦街道（国道160号）沿い、女良漁港近くに建つ。ブリを獲る大敷網を保管するため大西彦右衛門が建てた倉（明治31年完成）



写真2 砺波市 消防自動車チャンドラ号
武野有希子氏撮影、北日本新聞2024年2月7日掲載

アメリカのチャンドラー社製。昭和3年から38年間、県内各地で活躍。砺波消防署で展示されている



写真3 魚津市 東山円筒分水槽
島田理恵氏撮影、北日本新聞2024年2月28日掲載
上流で取水した片貝川沿岸用水を下流右岸の三

荒川放水路通水 100 周年記念を踏まえた 旧岩淵水門の重要文化財指定について

～ 地域住民の想いが詰まった文化財 ～

NPO法人 あらかわ学会 伊納 浩

1924（大正 13）年に完成した旧岩淵水門（通称：赤水門）は、1910（明治 43）年の東京大水害を機に隅田川の放水路として人工的に開削された荒川放水路（現・荒川）の分派部に設けられた水門で、当時でも珍しい通船部分（5 号水門）が横引きの水門であった。

その後、広域地盤沈下などから治水機能確保するために 1960（昭和 35）年に門扉の継ぎ足などの改築が行われ、水門の姿（形や色など）を変えた。さらに 1973（昭和 48）年には荒川の計画水位の見直しにより、旧岩淵水門の高さ不足などが生じたため、1982（昭和 57）年に約 300m 下流に新しい岩淵水門（通称：青水門）が建設された。

このため、役割を終えた旧岩淵水門は撤去されることとなったが、地元住民の方々が『数多くの出水から町を守ってくれた水門を撤去することは忍びない』と訴えがあり旧岩淵水門は 1960（昭和 35）年当時の姿で現地に残ることとなった。

それから 40 年ほどたった 2002（平成 14）年に旧岩淵水門を建設当時（1924 年）の姿に出来る限り戻し（形や色などを戻す）大正期の土木技術を示す価値ある構造物として重要文化財にする動きが出でてきた。しかし、地元住民からは、子供のころからの原風景として長年慣れ親しんだ水門の色や形を、重要文化財にするために水門の色を赤からグレーに塗り替えるなど建設当時の水門の姿に修復することについて抵抗を示したため、重要文化財指定への動きは保留となった。

その後 20 年ほどたった 2023（令和 5）年に、翌年の 2024（令和 6）年に荒川放水路通水 100 周年を迎えることから、荒川放水路のシンボルともいえる隅田川と荒川放水路の分派部分にある旧岩淵水門を国の宝として重要文化財にしてはどうかとの意見が市民団体から出てきた。

そこで再度、重要文化財にする動きとなり、地元住民が慣れ親しんだ 1960（昭和 35）年に改築された姿で、2024（令和 6）年 5 月に文化審議会から旧岩淵水門を重要文化財に新規に指定することが文部科学大臣に答申された。

このように、旧岩淵水門は、地元住民の方々の想いが詰まった文化財であり、その想いは、日頃の生活の中で生まれ、単に建設当時の土木技術の高さや歴史的価値を示す構造物として当時の姿に修復するのではなく、半世紀近く地域の方々に親しまれ“形”で残すことも重要な選択肢と言える。

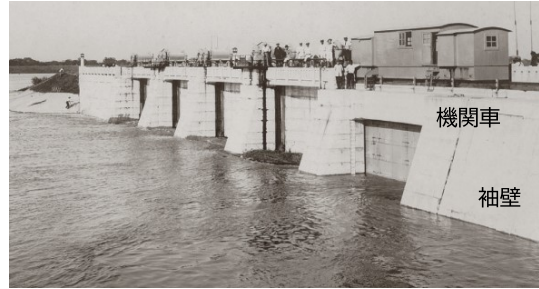
なお、土木技術者の私からすると、旧岩淵水門は建設当時（1924 年）の姿と改築時（1960 年）の姿が 2 つあり、現地で見ている姿は改築時の姿であることを一般の来訪者にわかりやすく説明し、建設当時（1924 年）の土木技術の高さや歴史的価値を理解していただいたうえで、その姿（1924 年時の姿）が広域地盤沈下という現象を踏まえ、今見ている姿（1960 年の改築の姿）になったことを知ってもらいたいと考えている。



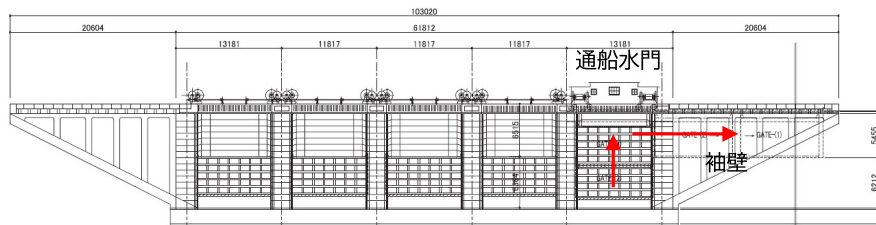
旧岩淵水門（赤水門）と岩淵水門（青水門）との位置関係

建設時(1924年)の姿

- ・通船水門は、2枚で1枚ずつ機関車を利用し右岸側の袖壁に横引きで収納
- ・水門の色はグレー



【上流側からの正面図】

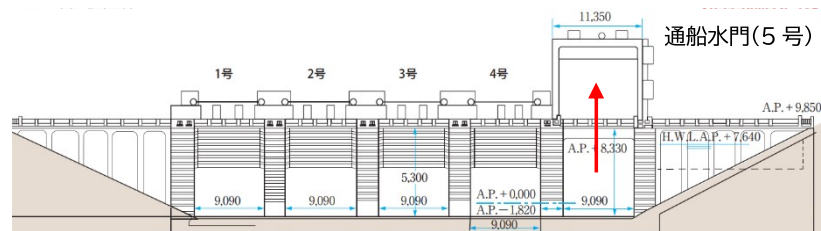


改築時(1960年)の姿

- ・通船水門は、2枚を1枚継ぎ足して上部に巻き上げる方法となる。
- ・水門の色は赤
- ・今見る2024年の姿となる



【上流側からの正面図】



出典資料

- ・荒川下流誌 荒川下流誌編集委員会 2005年
- ・岩淵水門パンフレット 荒川下流河川事務所
- ・国土技術政策総合研究所資料No.433 景観デザイン規範事例集(河川・海岸・港湾編) 2008年

「戦後土木施設の歴史・文化的価値に関する調査小委員会」 の活動について

日本大学理工学部まちづくり工学科
阿部 貴弘

土木学会土木史研究委員会では、約1年の準備期間を経て、2014（平成26）年6月21日に「戦後土木施設の歴史・文化的価値に関する調査小委員会」（以下、小委員会）を設置し、本格的な調査を開始しました。小委員会の設置時のミッションは、以下の通りです。

主に戦後に建設された土木施設（以下、戦後土木施設）を対象として、

- ①歴史・文化的価値を評価するための基礎資料の収集・整理
- ②価値評価の方法論の構築
- ③比較的高い価値を有する重要物件の価値付けとリスト化
- ④戦後土木施設の価値啓発に資する教材もしくは書籍等の取りまとめ

平成26年度は、一般財団法人第一生命財団及び公益財団法人大林財団の助成を受け、戦後土木施設の歴史・文化的価値評価の方法論構築に向けた課題及び今後の調査実施にあたっての課題を抽出しました。平成27年度以降は、文化庁の調査委託を受け、年度ごとに調査対象分野（事業分野及び構造物種別）を選定し、調査を実施してきました。

具体的には、まず、戦後土木施設を取り巻く社会・政治状況等を整理したうえで、エポックメイキングとなった事業や、工法や材料の転換点、さらに技術基準の改定時期など、主に計画・設計・施工技術の変遷に着目して、事業分野別に小史を取りまとめます。次に、この小史を踏まえて、1次調査と称して、各種の文献調査から調査対象候補施設をリストアップします。

さらに、2次調査と称して、重要物件について詳細な調査を実施します。重要物件の抽出にあたっては、「評価対象選定の観点」（戦後土木施設の特徴を浮き彫りにするためのトピック・キーワード）と「評価軸」（対象施設を評価するための軸）を設定し、これらの側面から、各事業分野の代表的な施設を抽出します。そのうえで、抽出した重要物件について、現地調査等を行いながら、詳細にその価値を見出していきます。

こうした一連の調査の流れや、調査にあたっての戦後土木施設ならではの課題、さらに個別の調査事例等については、これまでの土木史研究発表会で詳報していますので、ぜひ過去の講演集をご覧ください。

さて、小委員会では、令和3年度から毎年度、事業分野別の調査結果を取りまとめた報告書を文化庁に提出しています。令和3年度は「河川・砂防分野」、令和4年度は「鉄道分野」、令和5年度は「道路分野」の報告書を取りまとめました。これらの報告書が広く公開されるまでには少し時間がかかるかもしれませんが、個別の調査結果等は、土木史研究発表会やシンポジウム、各種雑誌等で随時報告いたします。

令和6年度以降も事業分野別に調査を実施いたしますので、ご関係のみなさまにおかれましては、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

編集後記

53号の発刊が2022年5月でした。その後、編集委員を若手に引き継いでもらったと思っていましたが、十分な引継ぎができず54号の発刊が遅れ申し訳ありません。

振り返ると土木史フォーラムが創刊されたのは1995年の11月です。当初は、年3回の発刊を基本に8ページの印刷物で土木史フォーラムを希望される方に郵送でお届けしていました。

その後、2005年には年2回の発行とし、郵送でお送りする方だけでなくウェブ版のニュースレターも発行し郵送費などの縮減に努めてきました。さらに2011年からは印刷費がかからないPDF版のみとしウェブ版のニュースレター配信となり現在に至っています。PDF版のみにしたため、掲載する記事（原稿）を印刷8ページ内に収める努力がなくなり編集作業の効率化も進みました。

一方、2008年頃、過去に発行された土木史フォーラムを読みたいとの問い合わせがあったのをキッカケに過去の土木史フォーラム（印刷物）を合本し、国立国会図書館などの図書館に納本いたしました。（現在は47号までを合本し納本）また、過去の土木史フォーラムもすべてPDF化し土木学会のホームページでいつでも閲覧できるようにいたしました。

若い方に編集を引き継ぐにあたり、土木史フォーラムの経緯の一部を書きました。（伊納）

土木史フォーラム No. 54 2024. 06. 03

監 修：土木学会 土木史委員会

発 行：土木史広報小委員会

代表者 緒方 英樹 一般社団法人アメノヒボコ土木サロン理事

事務局：伊納 浩 Email：ara43ino@gmail.com

土木史委員会HP

<https://www.jsce.or.jp/committee/hsce/index.htm>

CONTENTS

-FORUM

Dams as civil engineering heritage Akemi Nakano 2

-LOCAL NEWS

Discussing modern Toyama through historical heritage Yoshiki Shirai 4

Regarding the designation of the former Iwabuchi Water Gate as an important cultural property in light of the 100th anniversary of the opening of the Arakawa Floodway Ino Hiroshi 7

-REPORT FROM CHSCE (Committee on Historical in Civil Engineering)

Activities of the "Subcommittee on the Historical and Cultural Value of Postwar Civil Engineering Facilities" Abe Takahiro 9